

2008年度 第86回 関西学生サッカーリーグ (第9節)

5/17 (土) 鶴見緑地球技場

第1試合 近畿大 vs 立命大

勝ち点が思うように伸びず、苦戦する両校。試合前、近畿大の田中幸雄監督は「まずは無失点に抑えること」と守りの狙いを掲げ、立命大の米田隆監督は「フィニッシュできっちりと終える」と攻めの課題を口にした。

この日の鶴見のピッチは荒れており、細かいサッカーには不向きであることは明らかであり、大味な蹴り合いも予想された。しかし、近畿大の中盤は持ち前のテクニックを武器に立命大を攻め立てた。特に、MF⑩平原研のパスとMF⑦枝本雄一郎のドリブルのアクセントが見事。11分には、中盤から丁寧に繋ぎ、最後は、MF⑭北井佑季が決めて先制。その勢いを保持したい近畿大だったが、前半終了間際、今季続出している退場者をまたも出してしまふ。

失速した近畿大に、後半、立命大が襲い掛かる。13分に左SB 28 前野貴徳が角度の無い位置から決めて同点。近畿大は「勝ち点1でも構わないと考えた」(平原)ため無理をせず守りを固める。しかし、立命大のMF 24 植松諒大が試合終了間際に弾丸ミドルを叩き込む。立命大、執念の逆転劇だった。

(文・サッカーライター ハヤシ ヒロヒサ)

近畿大 1 { 1-0 } 2 立命大
0-2

得点(アシスト)者
11分 ⑭北井(③小倉)

得点(アシスト)者
58分 28 前野(⑧福本)
89分 24 植松

第2試合 桃山大 vs 同大

桃山大 0 { 0-0 } 0 同大
0-0

相手に研究され、攻守の歯車が狂い始めた感のある同大。試合2日前の練習を取材した際には、「狙われているポイント」も意識して紅白戦を行っていた。ただ、短期間での修正は、完全には間に合わなかった。守備陣が奮闘して零封するも、自慢の攻撃陣がまったくの不発で、スコアレスドローの結末。後半13分に攻守の要、MF⑩荒堀謙次が退場処分を受け、10人になってからは成す術が無く、奇跡的に勝ち点1を確保したに過ぎない。

その意味では、桃山大は、勝ち点3を取りこぼしたという表現が相応しい。非常に丁寧に、同大守備陣のギャップを狙って攻撃を仕掛け、シュートも決定的なものが多かった。改善出来る点としては、シュートの意識だろう。完全にフリーな状態で放つシュートでも、渾身の力を込めて打つ場合が多く、冷静にコースを狙う余裕があれば結果を変える事が可能だと映った。

それでも、桃山大・松本直也監督は「完封出来た事は自信になる。攻撃もやりたい形だった。」と前向き。同大、MF⑧大森一樹の「読まれている点を改善しないと。」という苦いコメント(文・サッカーライター ハヤシ ヒロヒサ)

5/18 (日) 三木総合防災公園陸上競技場

第1試合 京産大 vs 姫獨大

ここにきて姫獨大が力を見せている。前節、びわこ大に大量得点で逆転勝ち。一部初挑戦の厳しさを想定し、着実にチーム作りをしてきた成果が出てきている。第3節以降、白星から遠ざかりトンネルを脱出できない京産大。順位では下位となる両者の戦いは明暗が分かれた。

前半4分、いきなり試合が動いた。姫獨大がFKを奪うと、DF⑪金大龍がゴール前へ蹴ったボールをFW⑩沈修輔が頭で合わせ、2試合連続ゴールを決める。28分にもゴール前でパスを受けた沈がポストとなり、ゴール前へ走りこんできたフリーのMF⑫塚田隆三が鮮やかに2点目を奪った。

後半、このままでは終われない京産大はハーフタイムに守備を修正し、姫獨大の攻撃陣を抑えるも肝心の攻撃がつかまらない。シュート数では上回るが、得点を奪うことができず、またしても勝利はお預け。一方、姫獨大は今期初の2連勝。課題の守備も無失点で終えることができた。「キツかった」と姫獨大の選手たちは勝ち点3を得る重みを口にした。

地道にチームを作り上げてきた姫獨大とは逆に、京産大は第4節以降大幅な選手の入替えや毎回変わる戦術面でも安定しない。主将・馬場悠企は「みんな迷いがある。個人的には、人が動くサッカーがしたい。」と語り、会場を後にした。第2節びわこ大に完勝したような走る力(文・フリーライター 久住 真穂)

京産大 0 { 0-2 } 2 姫獨大
0-0

得点(アシスト)者
4分 ⑩沈(⑦金)
28分 ⑫塚田(⑩沈)

第2試合 大院大 vs 関学大

大院大 0 { 0-0 } 1 関学大
0-1

得点(アシスト)者
89分 ③飯田(28 阿部)

土曜日の立命大に続き、この試合でもロスタイムの奇跡が起こった。両者スコアレスで迎えた後半ロスタイム。幾度となく決定的な場面はずして来た関学大が、最後の最後に奪ったFKのチャンスを決めた。いつ試合終了を告げる笛が鳴ってもおかしくない状況で得たFK。ゴールからはやや遠いが、早いリスタートでFW 28 阿部浩之はゴール前にいる仲間へ向けて一本のクロスを選択。待ち構えていたかのように、DF③飯田洋介がヘディングで決め、待望のゴールが生まれた。「狙い通り。フリーと分かっていたので、いいボールがきたら決めるだけだった。」と、決勝弾で一躍ヒーローとなった飯田は笑顔で話した。リーグ中断前の最終戦。関学はリーグ上位進出、関西選手権を勝つためのはずみとなる大きな勝ち点3を得た。

一方、試合終了間際のまさかの失点で敗者となった大院大。速攻が持ち味の関学も、連戦の疲労から動きに精細を欠いていただけに悔やまれる敗戦だ。主将・DF⑥馬場悠も「引き分けにもっていきなかつたのが一番きつい。最後の集中力で負けた」と終盤、関学大の怒涛の攻撃を抑えきれなかつた敗因をあげた。攻撃面では、中盤を関学大に抑えられ、得点源の2トップにボールを供給できず、痛い敗戦となってしまった。

(文・フリーライター 久住 真穂)

5/18 (日) 大阪長居スタジアム

第1試合 阪南大 vs 大教大

阪南大が6連勝。得失点差1でびわこ大に次いで2位に上昇してきた。決勝点は後半8分、左からゴール前に入ったボールを、いいポジショニングをとっていたMF⑯平野洋二郎が押し込んだ。大教大DFのミスではなかったが、それまでDFが小さくつないで逃げるクリアリングにいささかの懸念があったが、タイミングよく阪南大に拾われてしまった。

3分後、5連勝と波に乗っていた阪南大も苦しんだ。阪南大はボランチを攻撃の拠点にして、強弱、長短織りませたパスワークが持ち味だが、それが機能しなかった。「ボランチがもう一つだった」(阪南大・須佐徹太郎監督)というように、MF⑧中濱雅之からの展開が、スムーズさを欠いてチャンスの芽がほとんど作れなかった。

もともと大教大DFもすばらしかった。⑤大久保悟の故障が癒えて復活、ラインの軸になったことで、中盤の自在の動きが出て、果敢なプレッシングが見事なまでに決まったこともある。ただ押し込まれた時のクリアリングの不安が、決定的な得点を相手に与えてしまったことが悔やまれる。

(文:関西学連)

| | | | | |
|-----|---|--|---|-----|
| 阪南大 | 1 | $\begin{Bmatrix} 0-0 \\ 1-0 \end{Bmatrix}$ | 0 | 大教大 |
|-----|---|--|---|-----|

得点(アシスト)者
53分 ⑯平野(⑦小寺)

第2試合 関西大 vs びわこ大

| | | | | |
|-----|---|--|---|------|
| 関西大 | 1 | $\begin{Bmatrix} 1-1 \\ 0-1 \end{Bmatrix}$ | 2 | びわこ大 |
|-----|---|--|---|------|

得点(アシスト)者
25分 27 保手濱(⑧稲垣)

得点(アシスト)者
12分 25 篠部
84分 ⑱岡野

びわこ大に勝利の女神が微笑み、暫定的ながら得失点差で待望の首位に躍り出た。逆に関西大は3位に転落。決勝点ははずみとっていいラッキーな得点。後半39分、びわこ大が攻め込み、一度は関西大GK①児玉剛が跳ね返したが、相手選手ともつれて倒れている間隙に、クリアボールを拾ったMF⑱岡野雅俊がミドルを豪快に叩き込んだ。

先制したのはびわこ大。FW 25 篠部拓真をMFにさげ、FW⑬平野甲斐をワントップにして、関西大DFのウラを突く策が生きた。FW⑬平野が突進してシュート、関西大DFがクリアしたが、フォローしていた篠部が決めた。関西大は左サイドが再三チャンスメイクしていたのが25分に生き、FW 27 保手濱直樹が華麗なループを決めて追いついた。

しかし、その後は両校に決め手がないというより、中盤での競り合いに終始し、ゲームは決定的なチャンスが生まれないこう着状態に陥った。その中でびわこ大に千載のラッキーチャンスが生まれて、貴重な決勝点を手中にする幸運をつかんだ。

(文:関西学連)